

コメント

「現代の哲学的な死の理解の諸相」 をめぐる三つの質問

関根清三

ペルトナー先生、素晴らしい基調講演をいただきまして、まことに有難うございました。現代のドイツ語圏の哲学が、どう死を主題化してきたか、につきまして、見事な鳥瞰図を提示してくださいました。また、これから二日間にわたるシンポジウムの、よい礎石を築いてくださったと思います。心から御礼申し上げます。

私は、特に、「死者と生者の共同性」という、このシンポジウム全体の枠組みと関わらせて、ご講演の中で指摘してくださいました幾つかの論点を敷衍展開していただけるような質問を、試みてみたいと思います。

三点に絞ります。

先ず第一点ですが、結論としてペルトナー先生は、5章2節のところで、ヴァーヘラー・フルデンフェルトの無の現象学的な立場に賛同され、そこにニヒリズムを内側から克服する可能性を見ておられます。確かにヴァーヘラー・フルデンフェルトが、始めの無と終わりの無に本質的な相違はないと言い、始めの無は、現存在を湧き出させる肯定的なものだと言うことによって、終わりの無としての死をも否定的に見ないこと——そのことは、魅力的な思想だと思います。しかし終わりの無は、生を根こそぎにするという意味で、始めの無と本質的に異なる面も又あるのではないかでしょうか。つまり、或る否定性を帯びたものなのではないでしょうか。ヴァーヘラー・フルデンフェルトの

考え方は結局、現代哲学が批判し去ったはずの、形而上学的な死（すなわち、希望のあるもう一つの生への移行）という考え方を、別の形で提出していることにはならないでしょうか。こうした問い合わせに対して、ペルトナー先生は如何お考えになられるでしょうか。この点を先ず伺えればと存じます。

これと連関いたしまして第二に、そもそも無をどう解すべきなのか、について伺いたいと思います。4章でペルトナー先生は、無について議論する際、無が存在するかのように議論するのは間違いだというヴェルテの指摘をご紹介くださいました。ヴェルテによれば、到来する無は、「人が一旦落ちたら二度と戻ってこない静寂の深淵」であって、その無から私たちはけっして逃れられないのでした。そして人はそのことを直視すべきだというのでした。また5章のバー・ヘルラ・フルデンフェルトは、現存在の始まりから終わりまで常に現存在と接している無を、現存在を生み出す根源としてイメージしていました。そしてこれらには、3章のハイデガーの影響が、陰に陽にあるように思われます。

前期ハイデガーにおきましては、無の開示は、単に世界を滑り落とすだけでなく、その滑り落ちてゆく世界を指示することによって、存在者の存在を示すことになると言われます。従ってこのようにして経験される無は、存在者の単なる否定ではなくて、むしろ存在者を存在者としてあらわにする現象と考えられていたと思います。換言すれば、存在者の存在に属する現象です。

また中期・後期のハイデガーにおきましても、西洋の歴史を当初から規定していたニヒリズムとは、存在の真理が欠在していること、つまり存在についての無を意味いたしますが、それは単なる欠落ではなくて、存在が欠落している無の場所こそ、存在の真理の現成すべき場所でありました。従って、むしろ欠落し無であるという仕方で、存在自身がそこに現れるというのが、存在忘却としてのニヒリズムの歴史だと言われていたと思います。

もし以上の理解に大過ないといったしますと、こうした、ハイデガーおよび

その系譜において考えられる無は、たとえばアリストテレスの*to mē on*や、教父の*creatio ex nihilo*といった西洋の伝統的な無の概念とは異なると言つてよろしいでしょうか。すなわち、*to mē on*は、全く現象しない質料中の質料である「非存在」ですし、また*creatio ex nihilo*「無からの創造」の無は、創造に先立つ無であって、ひたすら欠如や否定を表しますけれども、それとは異なる概念と言ってよいでしょうか。あるいはまた東洋の諸思想におけるような、有無の対立を超え、有をもそのうちに内包するような無といった発想とも、あくまで別種のものなのでしょうか。それとも、そうではなくて、存在の無としての死を介して、ここには何らかの共通性が見て取れるのでしょうか。

今日は、西洋の中世哲学や否定神学、あるいはインドのナーガールジュナの空の思想や禅仏教、そしてまた中国の老荘の無為自然の考え方など、それぞれの専門家が居並ぶ豪華なシンポジオンですから、この辺りに一つ、共通の話題がありはしないかと思って、敢えて議論の呼び水となるようなことを申しました。従いまして、これはペルトナー先生への直接の質問というよりも、フロアーからの御発言・応答を期待しての質問ということになります。

さて最後に第三に、今日のニヒリズムの哲学と、明日の心理学や社会学、あるいは美学・宗教学といった諸分野の御発題との、架け橋を作るための質問をさせていただきたいと思います。少なからぬ論者と共に私も、総じてニヒリズムの哲学には他者の問題が希薄ではないかと考えております。「死は、本質的に私の死だ」というハイデガーの言い方に集約されるような意味で、そこで問題とされるのは孤独な死です。確かに、死ぬとき人は孤独であり、独り人生の実存的な決着をつけねばならないというのは、ある意味でその通りだと思います。しかしそれは現実の死にあっては一面にすぎないのではないかでしょうか。特に現代社会にありますQOL (Quality of Life) だけではなく、小原信氏などが指摘されますように、QOD (Quality of Death) も

問題とされつつあります。その場合、孤独死というのは、誰からも顧みられない死として、QODの値が低いものとなります。むしろQODの質が高いのは、家族や友人に惜しまれつつ、生前の交わりに感謝し感謝されつつ迎える死であり、その方が望ましいのではないでしょうか。

確かに、孤高の実存的な決意に満ちた、独我論的な死を敢えて選び取ることもありますでしょう。あるいは生前、愛する者も愛される者もなく、孤独に死ぬことを余儀なくされることもありましょう。あるいはまた、ハイテク医療にまかせた機械的延命の後の、冷ややかな眼差しの中で、待たれる死もありますでしょう。さらには、孤独と後悔と怨念に満ちたような死もあります。

しかし他方、他者との関係の中で、赦しと和解のある死、感謝と感動のある死、温かいまなざしに包まれた死、惜しまれる死があることも、また事実なのではないでしょうか。そしてそのように死んで逝った者は、後々までも、生き残った者の記憶の中に生き、このシンポジウムのテーマである「死者と生者の共同性」は、彼・彼女の死後もなお、続くのではないでしょうか。それこそ、生と死のニヒリストイックな無意味化を実践的に脱する、一つの方向を示唆するものとはならないでしょうか。しかもそれは、古来の死生観における、死後の靈魂や来世、輪廻や復活といった、一定の「形而上学」的信仰へ超越することではありません。なぜなら、それは、誰でもが共有しているような、生前の他者関係に内在しつつ、現世の生者の記憶の中で達成されるものだからです。さらに言えば、古来の形而上学的信仰も実は、死の脅威をごまかすための単なるフィクションなのではなくて、そうした生前の他者関係の豊かさから生まれて来た、或るアリティの表現だった——そういう面も或いはあるのではないでしょうか。

死における別れの言葉は、竹内整一氏などが印象深く論じておられるよう、英語では、“Good by[e]!”、すなわち、“God be with ye!”ないし“Good by God!”であり、ドイツ語の“Auf Wiedersehen!”も来世での再

会を期する言葉となるでしょうが、日本語の「さようなら」は少しニュアンスが違います。「さようなら」は「そのようであるならば」を意味し、来世や神を前提とした形而上学的な死と必ずしも結び付かないで、現世の人間関係の終わりが「左様なら」、全てはよいのだといった肯定、とも解されます。つまり、孤独を越えた人間関係の中で、生を、そして死をも肯定する、温かい生死の受け止め方を暗示しているようにも解されるわけです。

いずれにせよ、私の質問はこうです。死後の形而上学的世界を想定すると否とにかかわらず、生者の記憶の中に生き続ける、死者との共同性。これが、心理学や宗教学等を含んだ多分野の共同研究であるこのシンポジウムの大きなテーマとなります。現代のニヒリズムの哲学が切り落としがちだった、他者問題を捨い取った、死のこうした扱い方は、哲学的にはそもそもあり得ないのでしょうか。これが私の三つ目の質問となります。

どうも有難うございました。